

海外レポート

アメリカの地政学と地理学に触れて

高崎 章裕

大阪市立大学大学院文学研究科の「インターナショナルスクール若手研究者等海外派遣プログラム」による助成を得て、2010年4月13日から18日にかけて、ワシントンD.C.において開催されたGeopolitics 2010 (Virginia Tech 主催) とAAG (The Association of American Geographers) Annual Meeting 2010に参加してきた。

1. Geopolitics 2010

まず、2010年4月13日にVirginiaのAlexandria Lyceum Hallで開催されたGeopolitics 2010に参加した。Geopolitics, すなわち地政学とは、地理的な環境が国家に与える政治的、軍事的、経済的な影響、国際関係及ぼす問題などを研究する学問である。そして、Geopolitics2010は、学問や理論、政治路線を越えて、さまざまな研究者たちが地政学の議論を活性化させるためのシンポジウムで、今回のテーマは21世紀の地政学の動向についてである。

スケジュールは大きく、5つにわかれており、地政学が、帝国主義や戦争文化、テロリズム、世界政治などとの関連から報告が行われた。なかでも、最後のセッションである、Geopolitics and Cosmopolitics (地政学と世界政治)では、デヴィッド・ハーヴェイ氏を迎え、彼の著作であるCosmopolitanism and the Geographies of Freedomについて討論が行われた。著書では、まず「自由」が政治行動を正当化するためにこれまで頻りに引き合いに出されてきたことについて触れられており、政治のアジェンダが、失敗するのは、地理の複雑性を無視しているのが原因であると主張されている。シンポジウムでは、これらの問題について、政治理論、社会理論、国際関係論、経済成長計画などさまざまな視点から議論がなされた。はじめて参加した地政学の国際学会ということもあり、難解なタームも多かったが、世界的にも有名な研究者を前にして、最前線の研究動向に触れる喜びを体感した。

2. AAG Annual Meeting 2010

4月14日、AAG Annual Meeting 2010が始まる。会場はMarriot Wardman Park HotelとOMNI Shoreham Hotel、二つのホテルを貸し切るのだが、ホテルだけでなく、街じゅう地理学者で溢れ、至る所に学会バッグを担いだ地理学者を見かけることができる。アメリカを中心とする世界最大規模の地理学者協会であるAAGは、参加者は約4,000人。セッションやシンポジウムの数も非常に多様で、かつ細分化されている。今回、私が参加した理由も、私自身の研究テーマと密接にリンクするセッションがおこなわれるためである。



レジストレーションに並ぶ長蛇の列

セッション・タイトルは、「環境運動を啓発的に呼び起こすオルタナティブなアプローチ」で、その目的は①環境問題に対して個人をいかにして動機づけを促し、啓発的な参加を呼び掛けるか、②環境教育に対するオルタナティブな教育学的なアプローチの模索、③環境問題に対して地理学が学問としてどのような関わりが持てるかどうか、以上の3つを課題として3名による発表が行われた。まず、最初のプレゼンターであるGrinnel Collegeのエリック・カーター氏からアメリカにおけるラテン系移民の環境価値がどのように「移植」されてきたのか、質的なデータをもとに報告がなされた。続いてペンシルバニア州立大学のグレッグ・ランカニュー氏から環境教育を通して自然との関係を高めるにはどうすればよいか、大学生へのアンケート調査をもとにした統計的なデータからの報告が行われた。そして、最後に高崎が公共事業に対する環境運動のオルタナティブなアプローチとして、日本の事例を紹介した。球磨川流域における環境運動が、ダム問題との距離を保ちながらも、住民を環境運動の中に巻き込んでいき、イデオロギーが脱政治化されていく運動の過程、および戦略について、その具体的な活動を示しながら、報告を行った。

ディスカッションでは、場所に根付いた活動をどのように取り組んでいくか、とりわけ地理学がもたらす役割

についての議論が中心的になされた。しかしながら、環境運動とはいっても、本報告でも多種多様な運動が存在しているように、運動のコンテキスト、すなわち、労働運動や、消費者運動、人種の問題などさまざまな背景から発生する環境運動に対してどのように地理学の理論が適用可能なのか、コンテキストの理解を踏まえたうえで、アプローチしていく必要があるという意見がフロアから出た。

大会は五日間続く。他にも数多くのセッションに参加した。なかでも、これまで動向を注目してきた「政治生態学」の中心的メンバーであるアリゾナ大学のポール・ロビンス氏に関わるセッションにも参加することができたのも大きな成果であろう。

政治生態学とは、政治的・経済的・社会的要因がどのように環境に影響を与えているかを研究する領域である。本セッションの目的は、政治生態学が、社会生態学の理論と経験主義に基づいた調査による国際的なコラボレーションによって、政治生態学をいかにして広めていくかという内容だった。報告者は、EU 諸国、アフリカ、アメリカなど、さまざまな国の研究者たちが、協同で調査を行い、その成果が報告された。フランスにおける政治生態学の動向について、Rhone 川流域に広がるデルタを、生物多様性の視点から、それらを保護するために取られた政策が、土地利用の相互関係を変化させ、社会的衝突と環境危機が生じたという報告や、EU における水資源の管理について、フランス政府の政策と水産業との関係性についてなど、報告内容だけでなく、政治生態学のそれぞれの立場や国境を越えたコラボレーションによる研究者の交流には刺激を受けた。

また大会中日の 15 日には、ペンシルバニア大学のケビン・パトリック氏をオーガナイザーに迎えた、ワシントン D.C. のモニュメントをめぐる巡検にも参加した。政治文化の巨大なミュージアムともいえるワシントン

D.C. には、ホワイトハウスや国会議事堂、ワシントン・モニュメントといった有名な建造物が観られる。しかし、ワシントン D.C. の中心市街を離れると、アーリントン国立墓地といった戦争をイメージさせる慰霊碑がある一方で、オールド・シティでは、アン女王様式、リチャードソン・ロマネスク様式、新ジョージア王朝様式、などさまざまな様式で設計された建築物も目立つ。

本巡検では、これらモニュメントや建築、景観において、ケビン・パトリック氏の説明を聞き、その都市の物語や象徴的意味がどのように語られているかについて、実際に現地を歩きながら、参加者たちと議論を行った。

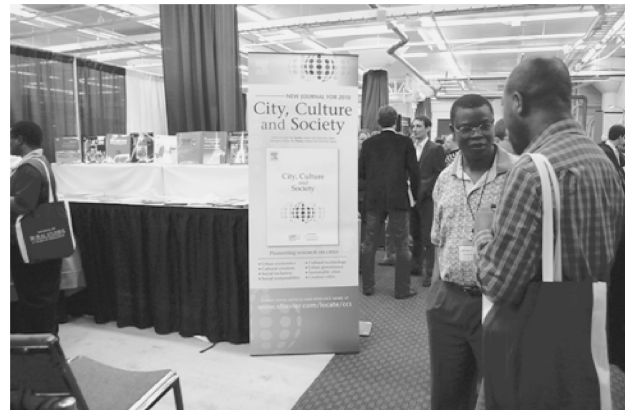
おわりに

帰国前日、最後のセッションを終えると、地下ホールの展示会に参加することにした。日本の学会と同じように、展示ホールには、研究や調査に有効な最新の地理学のツールや図書などが並べられていたが、やはり規模が違う。ホテルの地下フロアをすべてオープンにして、何百人もの参加者たちがパーティー会場のように会話をしている。そんな中、Elsevier 社の前を通りかかると、巨大なポスターが目の前に飛び込んできた。大阪市立大学都市研究プラザが刊行する City, Culture and Society 誌だった。AAG の会場で、まさか身近な刊行物に出会うとは想像しておらず、CCS の国際発信力に衝撃まで覚えた。

これまで、英語による国際発表は国外でも数回行ってきたが、それらはすべて英語を母語としないアジア圏での発表ばかりで、ネイティブの参加も少なかった。今回の AAG に参加したことで、言語の問題を超越し、研究者として研究内容や問題解決について議論できたことはとても重要で、改めて国際発信力がどれほど重要なのかについて考える機会になったと思う。



巡検の様子



CCS ポスター